

坏や五所川原産須恵器を伴って検出されており、また旧目名川跡地に面する畑地などでも確認されている。10世紀中葉には擦文時代の集落が旧目名川跡地に沿って形成されていたものと推測されるが、この館の成立の意味を考える上できわめて貴重な資料となった。標高4～5mの平場を占地し、先行する擦文集落の上に築かれたと推される館主体部の空間は、表面観察で認知される土塁や堀など防御のための囲郭施設に乏しい。館西端の標高12mほどの平坦面は外海に眺望も開け、監視哨としては好適地であるが、標高差を生かした勝山・花沢館跡のような山城とは異なる構造を呈している。

第3節 勝山館跡

1 沿革

勝山館の当初の館名は「上国館」で、蠣崎氏が本拠を松前大館に移した後は、副城（支城）の意で「和喜之館（脇館）」とも呼ばれるようになった。

築城年代は、『福山秘府』の文明5年(1473)条の「上国館内に八幡宮を造立、館神と称す。」の記事からその前後とされている。

永正11年(1514)、光廣・良廣父子が小舟180余艘を列ねて松前大館に進出したが、勝山館の築城から約60年ほど経た時代の大事件であった。

同年秋には、蠣崎宗家は留守となった上ノ国を光廣二男の高廣に守護させた。高廣は永正元年(1504)に泊館の館主に就いているので、上国館の館主も兼ねさせたのであろう。大永元年(1521)の高廣没後は、高廣の息男基廣に上ノ国を守護させているが、『新羅之記録』に「上之國泊之館主蠣崎太郎基廣」とあるので、基廣も泊の館主を兼ねていたのであろう。

その基廣は道南十二館の一つ脇本館（知内町涌元）の館主南條季継の嫡孫廣継の養男となっていたが、蠣崎家の当主季廣に謀反した廉で天文17年(1548)に誅殺され、その後は、後見人たる養父の廣継が上ノ国守護に座に就いた。廣継の没後は、高廣の跡を季廣の六男正廣（慶廣の弟）の系統が受け継いでいるので、正廣が上ノ国守護の地位に就いたものと推されるが、その正廣も天正6年(1578)近州安土にて織田信長に拝謁して、帰国後謀反の廉で失脚している。

永正11年、蠣崎党は松前守護職の本拠・松前に進出したが、大永5年(1525)の春頃までに、相次ぐ「東西蝦夷蜂起」によって、東は鵠川から西は余市まで居住範囲を広げていた本州人は居留地を追われ、また殺害され、生き残った人々は松前と天河（上ノ国）に集住するようになった。

その後、集住がすすんだ松前大館と上之国和喜之館に対する西部エゾの攻勢が強まる。享禄2年(1529)のセタナイのタナサカシ、天文5年(1536)のタナサカシの女聳タリコナによって上之国和喜之館に対する攻撃が加えられている。いずれも蠣崎家当主の良廣が謀略や騙し討ちをもって侵攻を退け、「自是東西総平安」になったという（『福山秘府』）。

天文20年(1551)の蠣崎党と東西エゾとの講和は、松前半島の先端部にまで追いつめられた蠣崎党にとってまさに起死回生策であった。この協約は、季廣にしてみれば、奪取した松前守護職の船役徴収権の強化と船役増収に繋がるものであり、東西エゾにとっては航行と交易の安全保障と交易の増大に資するもので、三者ともに「実利」があった。

諸国から来る商賈との交易場を松前城下に集中させるため、東西エゾの両首長は「夷狄」の商船の松前城下との往還の管理統制を管掌し、交易場の管理者たる季廣は、交易場における取引の統制を中心に船着き場等の条件整備などを分担することを骨子としたもので、船役の一部を東西エゾに分与するという付帯条項が講和の重要なポイントとなったものと推察される。

松前城下への交易の集中一元化を図るためには、「夷船京船」の直航の阻止という強権発動が不可欠である。直航する商船に対して海上で略奪（海賊）行為に共同で及んだことは容易に想像できよう。それを可能ならしめたのは、沖合を航行する商船を広範囲で捕捉できる監視網と、追尾できる手船を常時停泊させておくことができる泊地の存在である。そのような自然地理的な条件を備えた適地が幅広い河口域と川湊を有する、ほかならぬ松前半島の天の川と知内川であった。両河川は「天文の講和」が企図した松前城下交易体制を東西で補完する「海関」であったと考えられる⁽⁴²⁾。

天文の講和後、西部エゾとの緊張が緩和し、関係改善がなされた結果、上ノ国館は西部上ノ国地方の行

政府としての性格を色濃くし、それまで見られなかった「城代」という役職名が記されるようになる。慶長の時（1582～1600）に家臣の酒井七之助が「上之國和喜之城代」に就いているが、蠣崎家の所領支配の行政機関としての性格を強めていったと榎森進氏は指摘する⁽⁴³⁾（榎森・1978）。

慶長元年（1596）、上ノ国に松前藩創業期の檜山伐採事業を管理する「檜山番所」が置かれたとの伝聞にしたがえば、西部上ノ国における地方行政府としての勝山館は慶長期頃をもってその役割を終え、檜山伐採の事業官庁ともいえる「官府」に取って代わられたようである。

しかし、館廃絶後も館神八幡宮と医王山薬師堂だけは崇敬の対象となっていたようで、天保13年（1842）正月の代参は雪深い中で行われている（巻末「資料編の『御旧国上之国江御代参被仰付候日記』参照）。

『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』は、「此館は洲崎、花沢の二館より後れて築造せられ、初め和喜館即ち脇館と称せしが、後今の名に改めしものの如し。」と記した。昭和34年には夷王山墳墓群とともに北海道の史蹟に指定されている。

2 調査の経緯と結果【第20・21図参照】

昭和52年度に『史跡上之國勝山館跡・花沢館跡保存管理計画書』が策定され、最初に整備のための詳細分布調査を行ったのは、夷王山墳墓群、藩主社参や代参などから一連の歴史が想定され、檜山道立自然公園の景勝地として賑わいもあった、規模の大きい勝山館跡であった。

昭和54年度から平成22年度まで30有余年に亘って、館跡主体部の第二平坦面を中心に総面積約25,000㎡に及ぶ調査が行われた。

昭和53年の保存管理計画は、事業の実施期間を昭和54年度から昭和63年度までの10ヶ年としたが、数度に及ぶ建て替えのため建物遺構は錯綜し、また共伴する遺物も多種多量で、遺構の復原年代を確定できなかったため、当初の計画期間を大幅に上回る調査であった。

1) 搦め手の調査（昭和54～56年度頃）

3条の空壕跡を検出したが、壕内堆積土の一部に魚介類の堆積層があり、館内での生活に伴うゴミ捨て場と考えられているが、その堆積に大量の骨角器や木製品などが混じっていた。

骨角器の主なものは、中柄（先端部を鎌や鋸頭のような刺突具に装着し柄に固定して使用する。）と骨鎌で、なかには鯨や鹿の骨や角の半製品や未製品、使用痕・補修痕のあるものもあり、「非和人系（社会）の遺物」と分類された。網野善彦氏のアイヌ・和人混住説の物証をなす資料の一部である。

周辺の調査では、41基を数える土葬墓群が確認されている。また、寺の沢地内には木樋（置樋）や深さ80cmあまりの木製溜井戸枠などの用水施設跡があり、水仕事をする空間が設けられていることも分かった。

2) 館神八幡宮跡及びその周辺の調査（昭和57～58年度頃）

館神八幡宮跡では、はじめに近世の礎石建物跡を検出し、のちに近世の遺構の少し北よりに間口一間六尺、奥行一間七尺の規模で中世の社跡を確認した。

3) 伝侍屋敷跡の調査（昭和59～62年頃）

主郭（第二、三平坦面）南東下の旧名「華の沢」は、地元「侍屋敷跡」との言い伝えが残っていた。平坦面で検出した21の段状の区画（地割り）から、約20棟ほどの総柱の倉庫跡と、10棟の掘立柱建物跡を発見している。3カ所ほどで鍛冶を行ったと推定される痕跡があるが、この地内は出土遺物が少ない。

4) 大手の調査（昭和63年度～平成2年度）

館跡の平坦面は昭和30年代後半からスギやトマツの植林が進んで、旧地形も確認できなくなっていたため、植林地等の伐開伐木を行ったところ、館跡正面大手の景観は一新され、第二平坦面の正面に空壕跡の存在が予測された。

昭和62年度に行ったトレンチ調査では、柵列跡や二重の空壕跡などを検出し、その後の詳細調査で橋・門・櫓も設けていたことが分かった。この大手を二重の空壕、橋、柵列（門）で固める構成は一貫

した計画のもとでほぼ同時期に成立したものと推測されている。

なお、二重の空壕の中間の土塁傾斜部から土葬墓を検出しているが、館に先行する墓、夷王山墳墓群に連なる墓地の一部が削平されずに残っていたとも考えられている⁽⁴⁴⁾。

5) 主郭の調査（平成3～15年度）

三段の平坦面の中央を幅3.6mの通路が通り、その左右は溝と段で100㎡前後の矩形状に地割りされ、建物が整然と建ち並んでいることが判明した。延べ約180棟ほどの建物跡を確認したが、これらの敷地や建物跡は館が存続した約130年の間に5～6回ほどの造り替えが見られ、6期の変遷が想定された。中央通路と地割、建物配置などは築造当初から計画されたものと推測された。

建物は、掘立柱建物跡と半地下式の竪穴建物跡にほぼ二分され、掘立柱の建物跡は3間×9間の客殿をはじめ、住居や倉庫、厩などに利用されており、竪穴建物跡は作業場（工房）や倉庫に使用されていたと考えられている。その他には井戸跡、鉄や銅の鍛冶作業場跡などを確認している。

6) 夷王山墳墓群の調査（昭和56年～58年頃）

館跡後方部から夷王山麓一帯にかけて夷王山墳墓群が広がっている。3ヶ年に亘る調査の結果、6地区622基におよぶ「和人」の墳墓を確認した。火葬墓群の中に土葬墓が混在することも分かり、搦め手地区で検出した41基の土葬墓も同墳墓群の一部を構成するものであることが明らかとなった。

これらの墳墓は駒ヶ岳d火山灰層（Ko-d、1640年降灰）と苦小牧－白頭山火山灰層（B-Tm、937・938年降灰）の間に築かれ、封土から出土した瀬戸・美濃大窯の皿、永楽通宝を下限とする副葬銭などから15世紀を上限とし16世紀後半を下限とする年代が与えられている。

7) 夷王山墳墓群第Ⅰ・Ⅱ地区補充調査（平成11～15年度）

史跡等活用特別事業の導入にあたって散策路整備が計画されたが、それに伴って主郭に至る散策路部分の補充発掘調査が行われた。その結果、「和人」の土葬墓や火葬墓のほかに、東頭位伸展土葬のアイヌ墓2基が発見された。太刀や小刀、漆器が副葬され、一基は合葬墓で、その一人はニンカリ（耳飾り）を付けていた。いずれも江戸時代のアイヌ墓と同一の埋葬様式によるもので、従来から指摘のあった館内でのアイヌ混住説⁽⁴⁵⁾を裏付ける有力な物証となった。

8) 館跡直下の宮の沢川両岸の調査（平成11～12年度）

旧笹浪家住宅（主屋）の保存修理に伴う宮の沢川右岸地区の調査で、Ko-d火山灰層直下の慶長期頃の遺物包含層から多量の遺物が出土した。

その中で特筆すべきは、イクパスイや桜皮巻の丸木弓、高台裏に刻印のある漆器、中柄などのアイヌ関連遺物である（第5章「周辺遺跡の概要」で詳述）。

9) 旧道跡、荒神堂跡、物見跡の調査（平成13～22年度）

第一平坦面から主郭を縦貫する通路は、古くは代参などに用いられていたが、昭和45年に自然研究路として整備され、改変されていた。

主郭の中央を縦貫する通路はすでに確認していたが、平成19年度からは、第一平坦面の虎口を経て、荒神堂跡の横を通り、館入口の物見跡周辺に至る旧道跡の繋がりを確認すべく調査を行った。その結果、館盛行時の通路と館廃絶後の旧道跡を確認した。

また、蠣崎宗家の季廣に謀反した廉で殺害された基廣の霊を鎮めるため建立したと伝わる荒神堂跡の調査を行った。文献によれば、江戸時代に2回に亘って修築されているようであるが、布掘りの柵跡、石積み痕跡、二間四方の柵跡、軸の異なる礎石建物跡を2棟検出し、伝説の堂跡の存在を確認した。

北東に延びる尾根筋には4箇所ほどの小さい平場が造成され、物見跡とされてきたが、下から2段目の平場から物見と想定される建物跡を検出している。

以上が、平成54年から平成22年まで30年余にわたる調査結果の大要である。

検出した遺構は全体で、掘立柱建物跡約200棟、竪穴建物跡103基、石敷き礎石建物跡1棟、井戸3基、土壇約250基、墓約110基、櫓、柵、塀、空壕、橋の跡などである。

中世陶磁器、金属製品、木製品など多量の出土遺物からは、武器や武具で身を固め、茶道をたしなむ武者、狩猟・漁撈具を携え山野河海を駆ける狩人、住家や厩の普請につとめる職人、フィゴの羽口や鉄滓などは鍛冶職人、銅の鑄造跡からは「鑄物師」と呼ばれる廻国の技術者集団が想起される。金剛盤や鉋杆（こしょ）などの宗教具からは北を目指した修験者たち、紅皿、毛抜き、簪、銅鏡などからは化粧に余念のない女性の姿も彷彿とされ、15cmほどの下駄を履いた子供の幼気な姿も想像できる。

梅毒に罹った人骨や、喫煙の風習を物語るキセルの出土は膨大な貿易陶磁の搬入とともに、この城館が海を通じ東アジアの世界と確実に繋がっていることを物語るものである。また、搦め手後方のゴミ捨て場に象徴されるように、ハレからケまで日々の生活全般にかかる日用品や食料残滓なども含め、あらゆる階層・年齢の占地居住を思わせるものがある。

とりわけ、アイヌ関連遺物や「アイヌ墓」からは近世アイヌに繋がる人々の存在を臆気ではあるが、輪郭を描くことができるようになった。「和人の館」と考えられてきた勝山館跡の様相は、当初とはだいぶ趣を異にするものとなった。

3 館跡の構造と性格

勝山館跡は北の中世を代表する山城として有名であるが、館跡主郭の地下に眠っている縄文前・中期の勝山館遺跡は気づかずに見過ごされている。

館跡の構造は、標高70~110m、幅100mほどの尾根を削平して切り開かれた主郭が中心を占地し、その前方大手には2条の空壕が屈曲して掘り切れ、第三平坦面の南側（搦め手）にも空壕が掘られている。主郭の周囲には柵列が巡り、東西の華の沢・寺の沢側の急斜面は直線的に切り落とされ、東側には華の沢倉庫群、西側には寺の沢用水施設が配されている。

北東に延びる尾根の尖端裾部は、旧名「無礎」と呼ばれる海浜地に接続する。その裾部の入り口付近には物見が据えられ、荒神堂付近まで急峻な尾根を掘り割った底道が続き、第一平坦面の虎口に取り付く。

第一平坦面から主郭正面を眺めると、大きな垂直の壁が高さ5m、東西約100mの幅で立ちはだかり威圧する。主郭の中央を通路が走り、通路の左右には住居や倉庫などが建ち、後方西側には館神が祀られ、前方西側は館主の空間が占地している。搦め手は3条の空壕が巡っているだけで、後方丘陵の稜線部へと続いており、搦め手の防御の手薄さは否めない。

標高も159mでさほど高くない夷王山が勝山館跡の後方に聳えているが、その山頂からは日本海に浮かぶ奥尻島や渡島大島なども遙かに遠望され、沖合を航行し、また大濶湾に接近する商船などの船影も容易に視界に入る。また、館跡の中央通路からは洲崎館跡を間近に見下ろすことができ、河口部における出船入船なども手に取るように掌握できる。まさに「海に顔を向けた館⁽⁴⁶⁾」といえる。

45,000点余を数える出土陶磁器でもっとも多いのが日用雑器の碗や皿で、青磁や白磁、染付の貿易陶磁と、瀬戸美濃大窯の国産品が多く、すり鉢では越前焼が圧倒的に多く、珠洲は若干である。これら陶磁器が示す館跡の存続年代は15世紀後半から16世紀末の間である。

この館の終末は、慶長期頃まで代々松前侯の先祖が居城していたとの天明8年(1788)の聞き書き（『東遊雑記』）などから、慶長初めとされてきたが、窯元生産地における編年との比較分析などからそれをほぼ裏付ける結論が導き出されている。

蠣崎宗家の松前大館進出後は、蠣崎家傍系の基廣や旧館主南條廣継夫妻の謀反、西部エゾの襲撃などが相次ぐが、遺構や遺物の状況は館の機能の衰退について否定的である。遺構と遺物の出土構成は館内での定住性を強く示し、都市的な性格が窺われるが、これらは蠣崎氏を中心に結集した非農業民の党的結合を強く示唆するものである。

30年を余る発掘調査で発見したアイヌ関連遺物は、中柄や骨鎌などの骨角器類、高台裏に刻印（シロシ）のある漆器や陶磁器、儀礼具のイクパスイ、狩猟具の丸木弓（ボンクー）などである。関連遺構は、館跡後方の墳墓群の中に「和人」の屈葬土葬墓を挟んで、ほぼ同時期の「アイヌ」墓2基を確認している。

城館の内部やその周辺には党的に結合した人々が居住しており、それらを統轄する領主と、「アイヌ」墓に埋葬された被葬者たち同族との間にきわめて強い親和力を想定し、また、被葬者たち同族（『正保日本図